

自著紹介『ラテンアメリカ・カリブ研究』

*Diplomacy Meets Migration: US Relations with Cuba during the Cold War* (New York: Cambridge University Press, 2018)

(日本語版)『外交と移民—冷戦下の米・キューバ関係』(名古屋大学出版会、2019年)。

神奈川大学准教授

上 英明

目次

序章

第1章 革命と反革命—ワシントン、ハバナ、マイアミの三角関係

第2章 暴力の遺産—米・キューバ関係とカリブ海のテロリズム

第3章 対話の機会—ジミー・カーターとフィデル・カストロ

第4章 危機の年—移民管理をめぐる米・キューバの外交闘争

第5章 反転攻勢—レーガンの登場と反革命の「アメリカ」化

第6章 共存と対立—移民交渉とラジオ・マルティが意味するもの

第7章 膠着の継続—冷戦終結と反革命勢力の政治的台頭

終章

「よい研究になるだろうね。でも、君の本を見るができないのは残念だ」。本稿の執筆依頼をお受けした際、最初に頭に思い浮かんだのが、この言葉だった。米国国務省の元高官マイルズ・フレchette氏から頂いた最後のメールである。わざわざ得体の知れない若者とのインタビューに応じたものの、結局、本の出版には辿り着かないという意味だろうか。それとも私が日本人であるから、おそらく本も日本語だろうと思われたのか。

いずれも著者の勘違いであった。彼はその数年後に帰らぬ人となる。おそらく本の出版までには時間がかかることを理解していたのだ。そして、それまでに自分が生きていることはない。

本書は半世紀にわたる米・キューバ関係の歴史を描き直すことを目的としたものである。なぜ2014年12月にいたるまで、両国の外交関係が途絶えていたのか。なぜ中国やヴェトナムと国交正常化を実現し、経済関係を深めてきた米国が、国交回復の条件として、このキューバにだけは体制転換を要求してきたのか。どうして冷戦期、そして冷戦後においても、キューバだけがこのような特別扱いを受けてきたのか。

こうした問いについて、従来においてはとくに在米キューバ人社会の政治的影響力を指摘することが常であった。1959年の革命以来、キューバの革命政権に反抗する勢力(いわゆる反革命勢力)が米国フロリダ州に集まり、全米人口の

1%に満たないにもかかわらず、ロビー活動や選挙政治を通じて国交正常化を阻止してきたということである。

そこで本書では通常の外交史とは異なるアプローチをとった。すなわち、二つの国家中枢にあたるワシントンとハバナに加え、反革命の拠点となったマイアミを物語の中心に据えたのである。通常であれば二つの政府のやりとりで済む外交の話わざわざ移民社会をまじえた三角関係として捉え直すことには、大変な労力を要する。しかし本書においては、こうでもしなければ米・キューバ関係の歩みを理解することは到底できない、という主張を展開している。

こうした独自の枠組みをとるがゆえに、本書は次の2点において特に際立った特徴を有するものとなった。まず、通常ワシントンとハバナの「外交」

(Diplomacy) をグローバル冷戦という国際関係史の文脈で捉えつつ、マイアミの「移民」(Migration) を生み出すキューバ社会の変容を中南米史において、そして移民を受け入れる米国社会の変容を米国史において、それぞれ考察したという点である。言い換えれば、米・キューバ関係の歩みを米国史、中南米史、そして国際関係史が重合する地点において追ったわけである。

そしてもう1点が、このような研究視角を正当化するために、ワシントン、ハバナ、マイアミにおいて膨大な一次史料を分析し、その成果をまとめたという点である。幸い、これまで入手できなかった新たな史料が相次いで関係各国で見つかることになり、本書の内容は当初の予定よりも重厚となった。その一方で、本務校における教務・事務仕事の増加による研究時間の圧迫、著者自身の怠惰、そして何より慣れない英語での執筆とそれに伴う校正作業の長期化も重なり、出版予定日は想定よりもだいぶ遅れてしまったのである。

歴史研究において一次史料による分析は不可欠である。どのような内容であれ、研究書というのは、分析対象となるものを自ら読み解き、比較考量した上で導かれた解釈によって導きだされた考察をまとめたものでなければならない。この作業を怠れば、歴史のプロとして失格である。

当然、史料の分析には時間がかかる。しかも、米・キューバ関係のように様々な思惑が常に交錯し、真偽が怪しい情報が飛び交うとなると、そもそも史料から読み取れた内容が客観的なものなのか、それとも史料作成者の勘違いによるものかも判別が難しい。ある文書で「○」と書いてあっても、次の日付の文書で、「実は×だった」と出てきて、昨日の「大発見」が数ある「落とし穴」の一つに過ぎなかったということもある。

こうして複数の史料による裏付けが必要になるわけだが、そのためには相当な量の史料をそもそも所有していなければならない。米・キューバ関係の場合、ワシントンの史料に基づく知見をマイアミ、あるいはハバナで得た史料によって、その真偽を確認するという作業を要するわけである。場合によってはこれでも上手くない。そこで本書では、さらにイギリス、メキシコ、日本、カナダ、そしてソ連の史料も可能な限り集めて使っている。

しかし、それでも埋めきれない場合はどうするのか。ここで用いたのが口述記録である。もちろん、この種の記録の扱いには注意が必要である。そもそも話を聞く相手が適切なのかどうか。いくら話してくれても、本当に当時の状況を熟知する立場にあったのか。巷の話を自分がさも体験したかのように話す人はいくらでもいるが、これは全く頼りにならない。

また、本人が本当に当時のことを鮮明に覚えているのかどうかも分からない。人間の記憶というのは基本的にはあてにならないが、何十年も前となればなおさらである。それから覚えていたとしても、話したがないということもある。こればかりはどうしようもない。途中までは勢いよく話が進んでも、ある話題に移ると急に口を閉ざすという具合である。

最も気をつけなければならないのは、当事者への過剰な感情移入だろうか。これは人間同士なのである程度は仕方がないことなのかもしれないが、それでも度が過ぎれば大変なことになる。歴史家は冷徹たる分析に基づいて自身の解釈を提示するべきであり、安易に特定の個人や団体の代弁者になることがあってはならない。

しかし、それでも口述に価値を見いだすことは可能である。まず文字史料に残されている情報がしばしば限られていることがわかる。本当はもっと面白い話が潜んでいて、それを聞くと文字史料の行間に隠された意味がより深く理解できることもある。また、当事者たちがどのような記憶を（真偽を問わずに）保持しているのかを確認することは、歴史認識を問う際には特に大事である。

そして同じく重要なのが、他の史料ではどうしても裏付けが取れなかった情報が、口述によって取れるという場合である。当然、ここでは当事者の発言をそのまま鵜呑みにするのではなく、その利害・関心に照らして丁寧な考察がなされるべきだろう。その結果として信頼に足るという判断が下されるのであれば、あとは研究者本人の責任において、準用すればよい。

私にとって幸運だったのは、合衆国、キューバ、そして移民社会マイアミで、多くの当事者たちからの協力を頂けたことである。これについては政治的な立場を超えて、歴史研究の重要性を認めてくれた方々一人一人に、感謝の意を表するばかりである。

とはいえ、話をする側はどのような心持ちなのだろう。友人の紹介で応じてくれた人もいれば、純粹に私の研究に興味を示してくれる人もいた。自身の思い込みを相手に押し付けようとする人もいれば、それまで政府の公式見解をくり返すだけだったのに、史料との食い違いを指摘されて苦笑いを浮かべる人もいた。もちろん、本当の心境は本人にしか分からない。

これに関して最も印象に残った相手の一人が、フレchette氏であった。米・キューバ関係について彼が話をしたのは私が最初で最後のようである。その彼が、当時の機密事情を自ら包み隠さずに話すのだから驚いた。インタビューを終えた後に頂いたアドバイスもある。「話したい相手がいれば、とにかく連絡してみるといい。それまで嫌がっていても急に話したいと思う日が来るかもしれない」。

歴史研究者にとって、口述記録は諸刃の剣である。裏付けが取れないことは当然書けないし、感情移入すれば自身の分析にも影響が出る。そもそも実際に会うまでにも準備に膨大な時間がとられてしまうし、準備しても相手に会えないことも多い。それでも歴史が現在と過去の対話である限り、実際に本人と話す機会を求めることには、その労力に見合う価値があると今は考えている。

あらためて本書の刊行に至るまで、お世話になった方々への感謝の気持ちを伝えたい。本書の出来が満足いくものであるかどうかは読者のご判断に委ねる他ないが、少なくとも後進の方々がより上のレベルの研究を行うための踏み台にはなるのではないか。せめて私が拾い上げた歴史の声を新たな物語の創造へと役立ててくれたら幸いである。